

職業教育とクラフト・ギルド

— 人間性の考察を中心として —

勝 部 邦 夫

教育という機能は色々な仕方でも表現し得るが、本質的には人間形成の営みであるといえよう。この場合すべての素質がゆたかな發達を遂げた「人間としての全體性」Human wholenessが理念的に目指されている。少くとも學校を中心とする狹義の組織的教育が描いている人間像がこのようなものであることは教育に關係ある人の齊しく認めるところであろう。

我々は人間存在の基本的な仕方をハイデッガーに従つて世界内存在として規定することが出来る。^(註1)この世界は抽象的なものではなくて、最も事實的な具、體的な構造をもつ世界であり、廣く社會的並びに自然的意味をもつている。ハイデッガーの言葉で言えば「吾々の世界」や「環境世界」を意味している。^(註2)それは又一一定不變のものではなく變化し發展する。人間は生れながらにして一定構造の世界を與えられたものとして受取るが、彼はこのような世界にあつてその制約に順應するばかりではない。逆に之に働らきかけ、多かれ少かれ變化を與えて次の時代に引渡すのである。教育の基礎的觀念として社會的適應という

ことが言われるが、それは我々の意思から獨立して居り、且つ必然的な特殊な形式をそなえた社會に生きて働らく爲に、種々な經驗を通じて我々自身をこの特殊社會の要求にあわせて調整することに他ならない。^(註3)然し教育の機能は單にこのような社會的適應にのみ止まるものではなくて、上に述べたような世界に對する働らきかけにおいても積極的な役割を果すべきものである。蓋し人間の存在の基本的な仕方がそのような二重的性格をもつているからである。教育の理想像たる全面的人間は少くともこの二重の役割を積極的に果すだけの能力を備えた人間でなければならぬ。處が現實の教育はどうであるか。

現在我々がその中にいる特殊な形式をそなえた社會は言うまでもなく資本制社會である。ここでは生産や流通の一切が資本制的特殊形式をとつて遂行されている。人間の生活は廣い意味での生産に支えられて居り、このことは原始人たと近代人たとで些かの變りもない。人間は如何なる社會、時代にあろうとも、何等かの仕方でも自然に働らきかけそこから生活の資を獲得しなければならぬ。然し生産の行われる形式は時代によつて異なるものであり、我々のいる資本制社會はその高度に發展した一つの形式に他ならない。この社會の特殊性は種

々の觀點から指摘し得るが、我々の當面の問題に關してその生産力について見るならば、機械制大工業を基盤とする生産力の飛躍的な發展を擧げることが出来る。人間の自然に對する働らきかけが、このような龐大な成果をもたらしたことは未だ嘗つてない。生産力のこの偉大な發展が機械によつて代表される労働手段の發達に負うことは勿論であるが、それは又分業の極度の發展による労働生産性の飛躍的な増進に負うところも極めて大きい。分業は周知のように種々の觀點から分類されている。即ち大別して社會的分業、場所的分業、技術的分業となるのであるが、この内、社會的分業は社會における職業の分化を意味し、その程度に應じて農工商などの職業分業と、農工商などの内部で更に専門化の行われる專業分業がある。場所的分業は地域によつて生産業を異にすることを意味し、自然的立地條件に基く場合が多いが、歴史的社會的原因による場合もある。技術的分業は一つの財の生産行程が技術的に分割されることを意味し、それは又一財の生産行程が技術的に分割されて夫々が獨立の事業の對象となる生産分業と、獨立の事業の内部における生産行程を分割し、各労働者をして同時に異なつた作業に従事せしめる作業分業との二つの亞種に分類される。労働生産性の増進にとつて最も重要な役割を果すのは技術的分業特に作業分業である。^(註4)

一切の人間の行爲がそこで完結し、封鎖的であつた原始的社會においても、體性、年令、自然的條件等による謂わば自然發生的な分業はあつたのであり、一般に生産力の發達史は同時に分業の發展の歴史であつた。資本制社會では上述のどの種類の分業も極度に推し進めら

れ、人はこのような分業の何れかの一分肢に所屬しつゝ生活している。人間のあり方は現實には分業の一分肢の擔當者たることにあり、その意味での職業的生活が彼の現實の生活である。人は巨大な資本制社會の一分肢を通じて自然に働らきかけ、又人間相互の關係を結び合つて居る。この機構は決して單純なものではなくて、謂わば無限に錯綜して居り、從つてその機構の極めて微細な一分肢を擔當しているにすぎない人間がこの機構を全的に認識し得る可能性は極めて低い。然もこの分肢が細分化すればする程愈々その可能性は減じて來る。人は彼の仕事がこの全機構の中でどうような役割を果しているかを知ることなく、その仕事を遂行している。作業分業が發展すると遂に人はコンベヤー・ベルトによつて不斷に流れて來る機械部品のネジを一つしめるだけの仕事を、一定時間集中的に行うような状態におかれる。然も我々のいる世界では、このような仕事が強行されている。何故ならば我々は之をしなければ我々自身や家族の生活を維持し得ないからである。この極度の専門化という事態が人間にもたらす影響は何であるか。嘗つて産業革命の過程にあつて分業の利益を強調したアダム・スミスは、又いみじくも専門化した職業人を次のように描くことを忘なれかつた。「分業の發展につれて労働により生活する人々の、即ち大多數の人々の、大部分の従事する仕事は少數の至極簡單な、屢々一、二の作業に限られることになる。處で大部分の人々の理解力は必然的に彼等の日常従事する仕事によつて形成される。……彼は人間としてなり得る限り愚鈍となり無智となるのが通常である。彼の心の無感覺状態は彼をして何か筋の通つた會話を味わい、又それに與かることを不

可能ならしめるのみならず、いやしくも寛大な、高尚な、やさしい感情を懷く能わざらしめ、従つて又私生活における普通の義務についてさえ、多くの場合正常な判断を下すこと能わざらしめる。況してや國家の重大にして廣汎な利害問題については彼は完全にその判断能力をもたない。」この事態は資本主義の高度化につれて一層推し進められて來た。

以上述べたような方向は人間的全體性の指向とは全く逆のものである。それは謂わば人間の抽象化或いは一面化の過程であり、人間性の喪失の過程であるということが出来る。原始的な社會は封鎖的、自足的であり、一切はそれ自身の中で完結する。労働過程における自然發生的な分業にも拘わらず、その社會の課題はその成員全部にとつて意味をもち、然もその意味は成員のすべてによつて具體的に了解され、この共通の課題が彼等を結びつけていた。課題が直接的であるが故にその解決にもすべての成員が自己のものとして参加したのである。かかる社會に生きる人々は最も全體的な姿で描かれるであろう。然るに生産力の發展、分業の發達と共に人間の抽象化、即ち多面的人間性拋棄の過程が進展し、アダム・スミスの描いたような斷片人が現出したのである。のみならず近代資本主義はかかる一面的な人間を要求しているのである。巨大な機械生産の機構は單純な一定類型の専門的作業能力をもつ労働者を大量に必要とする。而してこの機構の中で人間の全體的労働能力は萎縮し部分的労働能力のみの一面的發展が進行し、かくて精神的及び肉體的な萎縮、痴鈍、畸型が生じて來る。分業は更に精神的労働と肉體的労働との分離を發展せしめる。我々は現實にはか

かる機構の一分肢としての職業を擔當しつつ生活しているのである。

先に教育の基礎的觀念としての社會的適應について述べたが、今日の教育はこの社會的要求に對して如何なる役割を果しているのであるか。假りに教育が近代的生産様式の要求する一面人、斷片人を形成しているとするならば、教育の理念とする Human wholeness との矛盾はどうなるか。

上述の點について直接的な關係をもつ教育の分野は職業教育である。職業教育は様々に定義されているが、その二、三を擧げて見れば、(一) 廣義では人をして社會的に必要な職業をうまく營むことを可能ならしめる諸經驗を指すものであり、^(註6) 狹義では (二) 我々の必要とする型の勞務が出来るように人に準備を得させ、又この準備を維持することであり、^(註7) (H. J. Smith) (三) 一人或いは數多くの個人を、或る一定の職業に訓練するために用いられる一連の管理せられ、且つ組織せられた經驗である。^(註8) 職業教育は歴史的にはここに定義された形から言えば、廣義のものから狹義のものへと、即ち原始時代の無意識的な吸收と模倣から、家庭内の意識的模倣、組織的訓練、更に家庭と専門職業が分化してからは徒弟制度による意識的組織的訓練、工場内の非組織的及び組織的訓練、そして近代の公私立學校などの手段による組織的訓練へと發達し來つたものである。そこでこの職業教育の一應の最高段階を示す學校による職業教育が如何なる理由によつて生れ、従つて如何なる役割を果して來たかについての詳細は後で検討することにし、我々の當面の目的のためにそれが近代資本主義社會の一應の發展

と時期を同じくすることを指摘しておく。私立學校や家庭教師を中心とする特權階級の教養、或いは狹義の Profession のための教育から、公立學校、義務教育を中心とする庶民階級への教育の普及は種々の觀點から説明されるが、少くとも職業教育に關しては自然科學の利用による機械生産の發達と不可分離な關係にある。ここでは生産力の偉大な發展に伴い人間の經濟的社會的活動が著しく増大したが、それらは、技術的にも社會的にも極度に細分され、かかる活動を遂行する個々の人間の擔任正面は愈々狭くなつてゐる。近代社會はかくの如く専門化し細分化された仕事を自らの職業として最も能率的に遂行する人間を大量に形成する事を要求している。職業教育は近代社會のこうした要求に、即ち一面の人間の形成に盲目的に奉仕すべきものであるか。學校という環境に於て一定年限の間、學習によつて大衆に一定類型の専門的職業的勤務能力を體得させる事をもつて足るのであるか。(註⁽⁹⁾) 軍隊教育は大量の人間を一樣に兵營に收容して、簡單な兵器の操作、例えば大砲の引鐵の引き方、彈丸のこめ方のような操作を一定期間わき目もふらずに反覆練習し、かくて一定類型の専門的的操作については最も能率の高い、そしてその意味で優秀な兵士を養成する。然し彼等は専門的操作以外の事については殆んど盲目であり、況んや全般の狀況を判斷して適切な處置をとるといふような事は不可能であり、このような高度の精神的能力は彼等からは分離して將校の擔任する所となる。職業教育はこのような軍隊教育を典型とすべきであるか。

近代社會は生産力の偉大な發展にも拘らず、或いはその事の爲に、人間性をより豊かならしめないで逆に人間性を奪い去り、人間を抽象

化した。又社會的な關係から暖い人間味が失われてすべての關係が物格化した。我々は教育特に職業教育がこの傾向を一層推し進め一面的な人間を形成する事に反對である。教育が Human wholeness を目指すことはあく迄正しいと考える。然らば上に述べてきたような生産機構、社會機構をもつ近代社會に於いてこの事は如何にして可能であるか。我々はその手掛りを得る爲に、職業教育が最初に意識的組織的に行われたクラフト・ギルドを検討して見ようと思う。

註(1) ハイテッガー・存在と時間(寺島實仁譯)八八頁。

(2) 前掲書、九七頁。

(3) Prosser & Quigley, Vocational Education in a Democracy, p. 1 (日本職業教育協會譯編、職業教育概論、一頁)。

(4) 堀經夫、經濟學入門、一三九頁以下。

(5) Adam Smith, Wealth of Nations. Cannan's ed. Vol. II, p. 267 (竹内謙二譯、改造文庫版、下巻、一六九—一七〇頁)。

(6) Prosser & Quigley, op. cit. p. 2 (前掲譯書、二頁)。

Cf. Struck, F. T., Vocational Education for a changing World, p. 6.

(7) Struck, op. cit. p. 7.

(8) Prosser & Quigley, op. cit. p. 2 (前掲譯書、二頁)。

(9) 青山秀夫、マックス・ウェーバー(岩波新書版)一〇四頁参照。

二

(一) 元來クラフト・ギルドは同一の職業に従事している者の集團であり。その意味からいえばクラフト (Craft) の中には純然たる商業を含み、従つてマーチャント・ギルドもクラフト・ギルドの一種類であるが、クラフト・ギルドの發展そのものがマーチャント・ギルドとの對立抗爭の中に進んでおり、且つ工業的色彩が濃厚であつた爲クラ

フト・ギルドは概ね手工業者の同業組合であるとされている。クラフト・ギルドの發生はマーチャント・ギルドの發生とわずか數十年の相違があるに過ぎず、大陸でも英國でも大體一〇〇年前後から結成されている。^(註1)然しそれが一つの社會的存在としてその性格を明らかにし、マーチャント・ギルドに代つて繁榮したのは大體十三、四世紀の頃である。この過渡期の形態は様々であつて英國のようにマーチャント・ギルドからクラフト・ギルドが比較的平穩に分裂派生した所もあつたが、一方大陸に於けるようにマーチャント・ギルドの勢力が強く兩者の間に激烈な鬭争があり、遂には暴力をもつてクラフト・ギルドの勝利に歸した所もあつた。

形式上、マーチャント・ギルドが包括的であるのに對してクラフト・ギルドは同一職業に従事する者のみによつて組織された。即ちマーチャント・ギルドは一つの都市に住むあらゆる職業に従事する者を職業の差異に關係なく包含する集團であつたから、原則として一つの都市には一つのマーチャント・ギルドがあるだけであつた。これに對してクラフト・ギルドは職業を單位として組織されたのであつて、小さい町でも數箇、大きい都市では數十箇のクラフト・ギルドがあつた。

クラフト・ギルドは最初市當局の嚴重な統制を受け、ギルドの役員の選舉は監督され、市の定むる取締規則に服さねばならなかつたが、次第に強力になると共に自治を獲得した。北佛やフランダースでは特に早くからギルドの自治が實現した。クラフト・ギルドは市當局や封建領主の爲に租税の徴收や治安警察事務を代行したばかりでなく、市民權の根據ともなりギルド員でなければ市民權なく、所によつては直

接に選舉團體となつた。クラフト・ギルドがこのように市政全般に參加し得たということは、後述する如くその内部に於いて完全な民主主義が行われていた事から、組合員がすべてすぐれた政治能力を持つていた事を示すものであり、その意味から大いに注目を要する。

(二) クラフト・ギルドはマーチャント・ギルドが中世都市に於いて擔當した職分を一層成熟した、然も原則的には一層純化した形で果した。即ちそれは同一職業に従事する者の生活の全面にわたつての統制を實現し、手工業者の全生活は擧げてギルドに吸收されたというも過言ではない。精神的な方面に於いては宗教的な對象を同一にし、各々のギルドはそれぞれ守護神をもち、これを集團の精神的統一の象徴として祀り、その祭日には全員が仕事を休み、ミサに出席し、更に聖書から取材した宗教劇や行進を賑やかに演じた。ギルドに於いて宗教的支配力が強大であり、それが守護神という形態をとつたことは手工業者の精神生活の低さを示すものであるが、同時に労働に於ける熟練の程度を深めて行く爲に精神統一を最も必要とした事を物語っている。

ギルドが相互扶助を一つの重要な目的とする事はマーチャント・ギルドでもクラフト・ギルドでも同様であつたが、特に後者に於いては同一の職業に従事する者の集團であり、又當時同業の者は同一の街に住んでいた爲に地縁的要素も加つて一層強化されていた。連帶主義と友愛と公正が最も強い指導原理であつた。だからその成員達にとつてギルドは眞に現實的な意義をもつており、国や町そのものよりもつと密接で重要な結びつきをもち、或る意味では彼等の家族の擴大した

ものとさえいうことが出来た。クラフト・ギルドに於ける相互扶助の現實の基準は組合員の生活の安定と生活水準の均等ということであつた。組合員が貧困に陥ればこれを救済し、病氣に罹れば常に見舞つて看護し長期にわたれば一定の金錢を給與した。これが爲、組合員は平素収入の一部を齎出して共同基金を作り、それを根底にしてギルドの内部に一種の友愛組合を作つたのである。組合員が死亡すれば葬式の世話は勿論、遺産がなければその家族に相應の扶助を與えた。更に救貧所を設置したり、素朴な形式の職業紹介や授産事業を行い、實際に失業を救済した。クラフト・ギルドの救貧事業は後に英國で發達した救貧法の起源をなすといわれ、又その共濟事業は高度資本主義社會に於ける社會保險制度の素朴な形態を思わせる。

41

クラフト・ギルドは又自己の後繼者たる子弟の教育に異常な熱意を示した。當時の學校はすべて教會の設立したものであつて特權階級の子弟の教育のみを行い、庶民とは何等縁のない存在であつた。これに對してギルドは自由な小學校(註2)を設立してその子弟を教育した。職業教育を中心とする全人的教育は後に詳述するように徒弟制度によつて行われたのであるが、これを更に一般教養において補うものとしてこの小學校は教會の學校に對し唯一の世俗的教育機關であつた。ケンブリッヂ大學が當時かくして設立したものの發展である事は有名である。統制と權力とは相伴うものである。統制を行わんとすれば權力を持たねばならず、權力なくしては何物をも強制することは出来ない。クラフト・ギルドにこのような強大な權力を與えたのは組合員の緊密な連帶責任感であつたが、これによつてギルドは諸多の法律的規定を實

施することが出来た。例えばギルドは組合員間に紛争が起ればこれを仲裁した。先ず當事者間に和解策を講じ、尙解決しない時は役員に仲裁を乞ひ、出来るだけギルド内部で事件を處理しようとした。そしてこのような自主的な盡力が失敗した時に始めて都市の普通裁判所に持ち出すことが出来たが、その場合といえども組合の長老の許可なくして出訴することは出来なかつた。これはクラフト・ギルドの秩序を維持して行く爲にも、又組合としての自主的な性格を維持する爲にも重要な行動であつた。後には發展したギルドでは簡単な事件について自ら裁判をした。

いうまでもなくギルドの活動のうち最も重要なのは經濟的なもの、具體的にはギルドの行つた經濟統制であり、以下少しくこの點を述べよう。クラフト・ギルドの經濟統制は典型的なものだといわれているが、その場合我々は組合員の精神生活の低さと、後述するような生産の技術的な單純さや、生産行程を制約する種々の條件を考慮に入れる必要がある。又ギルドの經濟統制は生産力の増進の爲ではなくて、組合員の社會理想を制度的に實現することを目的とするものであつた。先ず第一にギルドは商品の價格を統制した。これはギルドの組合員が生産者たると同時に、消費者たる二重の性格を持つており、公正な價格を維持することは生産者としてはその生産を合理的に遂行して行く爲に必要であり、消費者としてはその生活の安定の爲に必要であつた。生産過程の單純な當時に於いてはこのことは又十分可能でもあつた。第二にギルドは製品の良質性を維持する爲にあらゆる取締を勵行した。悪質な商品に對して顧客を保護することは公正の概念に合致す

る。製品については微細な點に至る迄規定され、更に原料や生産行程、道具に至る迄規定を受けるに至つた。ギルドの役員は隨時組合員の仕事場に於いて製品検査を實施し、違反者は處罰された。検査の便宜の爲仕事は日中だけ行い、仕事場は通りからよく見える所に設けなければならなかつた。第三にすべての競争を排除した。クラフト・ギルドは相互扶助の團體であつたが、そのことは組合員達が經濟的にも社會的にも平等であることを必要とした。一部のものに富が集積することは嚴に戒められねばならず、この爲にはあらゆる機會の均等が全組合員に確保され維持されることが必要であつた。例えば仕事の相互融通が規定され、原料購入の機會も統制され、抜けがけが禁止された。かりに同僚より安く原料を購入しても彼は原價でこれを提供しなければならなかつた。賣占、買占は勿論、特別の策を弄して顧客を自己の方に吸引することも禁じられた。更に重要なのは労働者の數の制限及び同業者間の協業の禁止である。機械を使用しない當時に於いては事業擴張の唯一の途は労働者を増加することであり、従つて労働者數を制限することは事業及び富の不均衡を抑壓する最良の方法であつた。この爲組合員は資本増殖の途を斷たれ、實質的にも平等の地位を保ち、安定した生活によつて自己の製作品に打込むことが出來た。これは中世に於ける職人氣質を作り出す上に大きな意味を持つた。

(三) 扱てクラフト・ギルドが以上に述べたように精神的社會的經濟的な、即ち生活の全面に及ぶ統制を實施したことは、その基本的な性格を示すものであるが、それは種々な背景や基盤を裏づけとして持つ

ていた。この背景や基盤こそ表面に現われた個々の事象を可能ならしめるものとして特に重要視されるべきものである。我々は以下これを(1) 思想的背景。(2) クラフト・ギルドの組織。(3) 生産様式。(4) 労働組織に分ちて考察したいと思う。

(1) 思想的背景 中世の都市には封建的束縛からの開放、自由と獨立の氣風が漲つていたが、それにも拘らず中世は全體として封建制度に立脚する社會であつたため、進歩的なギルド員と雖も中世的思想から完全に解脱することは出来なかつた。そのことは前述のギルド員の精神生活の低さや、ギルドの規則の行間から明らかにかがいはること出來る。中世の社會には教會の絶對的權威のもとに一つの全體主義が支配した。社會そのものが一つの有機的な構成體をなし、個人はかかる有機體の構成分子であり、かかるものとしてその存在意義を持つものとされた。従つて全體としての社會の組織に對して有機的な奉仕關係にたつべきものであり、そのような關係が身分制度として制度的に固定されていた。クラフト・ギルド内部の身分關係は所謂封建的身分のように相互に隔絶したものではなくて、後述の如く相互に融通性を持つものであつたが、それは兎も角、手工業者も社會に對して有機的な奉仕關係に立つものとして、即ち社會に必要な財貨を生産するものとして、社會的に尊重されたのである。中世を支配した社會的公正の概念はこのような奉仕主義から發しているともいえよう。貪欲は罪惡とされた。分相應を超える富の蓄積は社會的公正に反するからである。經濟の世界を支配するものは欲求充足主義であり、消費は分に應じたものたるべく、生産はこのような消費を充たす爲にのみ行わるべ

きであつて、蓄積の爲の生産の如きは強く排斥された。かく均衡と安定の中にあつて人々は經濟の規模は相對的に固定したものであるとの思想を懷き、一方が餘分に得れば他方で誰かがそれだけ失うと考へた。對内的な競争の禁止や對外的な獨占の保持もかかる考へ方に基づいてゐる。

クラフト・ギルドが生産者の保護のみならず、消費者の保護にも同じように力を盡したことは上に見た奉仕主義の觀念に基づいてゐる。消費者に公正價格を保證したばかりでなく、製品の質の低下を防止する爲検査を勵行し、消費者の支拂う對價に値するだけの製品を提供するようにしたのも、すべて奉仕のモラルによるものといふことが出来る。

従つてギルドの手工業者は奉仕主義の職業觀、マックス・ウェーバーの用語に従えば有機的職業倫理をもつていた。そこでは人間的な關係が重視される。中世の社會は近代社會のように人間的な關係までも物的な關係として現われるのは全く異つて、人間的要素の支配的な社會であり、個人の奉仕はかかる人間的關係への奉仕を意味し、この職業觀も人間的秩序に最も強く繋がつていた。然しギルドの手工業者はもう一つの職業觀を持つていた。それは「仕事本位」の職業觀である。この職業觀は例えば職業を富の蓄積というような私的欲望の手段と考へる見方と全く異なるのはいうまでもなく、職業は人間的秩序としての社會への奉仕の手段であるとする第一の見方とも異つてゐる。それは自己の仕事そのものに没入することに謂わば藝術的な喜びを見出し、職業を價值||自己目的とする職業觀である。これは外部的強制によるものではなくて自發的自主的であり、「仕事に生きる」とか「職

業に生きる」とかいう生活態度はここから生れてくる。ギルドの手工業者が「仕事三昧」の境地に達し、己れの製作品の改善に全身全靈を打込んで遂には入神の業に達したこと、或いは職人氣質、名人氣質といわれるものの根底にはこのような職業倫理があつたのである。

重要なことはクラフト・ギルドに於いて社會本位の職業觀と仕事本位の職業觀とが見事な統一を示してゐたことである。即ち社會本位の職業觀では人間的秩序としての社會への奉仕ということが強く要求される爲、個人は社會の中に埋没してしまひ個性は完全に没却される。この職業觀は人間的であると同時に非個性的である。これに對して仕事本位の職業觀に於いては人は仕事に没入すること以外何物をも顧慮しない。人が仕事という即物的なものにひたすら従事するのみで、他

を顧みないという點では最も非人間的であるといわねばならないが、一方仕事への没入は自己の技術の爲し能う最善の製作品を作ることの意味する。ここでは各自の個性が最大限に發揮される。生産物は生産者の人格を表現する藝術品である。この職業觀はそれ故に非人間的であると同時に個性的である。クラフト・ギルドでは、例えば消費者の保護の爲の製品検査をギルド自身が勵行したことに端的に現われてゐるように、社會への奉仕は手工業者が自己の仕事に専心打込み、すぐれた生産物を作ることによつて達成され、逆に手工業者は自己の技術のあらん限りを盡し、最も個性的な生産物を供給することによつて社會的な役割を果すことが出来た。

(2) **クラフト・ギルドの組織** クラフト・ギルドは、同じ職業に従事する親方によつて組織されてゐた。親方でない職人や徒弟は獨立の手

工業者とは見做されず、従つて組合員にはなれなかつた。然し後述の如くこの階層は隔絶したのではなく職人も徒弟も結局は親方、従つてギルドの組合員になるべきものであつた。獨立の手工業親方である限りはすべての者がギルドに加入しなければならなかつた。

クラフト・ギルドを統轄する者は組合長であつた。この組合長は種々の名稱をもつて呼ばれる役員によつて互選され、この役員は又總會に於いて選舉されるのが普通であつたが、時には市長の指名によることや前役員の推薦によることもあつた。役員は二人乃至七名であつてギルドに關係ある一切のことに責任を有し、前述した各種のギルドの活動に關し監督、検査、違反者の處罰等の任に當つた。役員は權限が廣汎であると共に重い責任を課されていた。すべての組合員は役員になる資格を有していた。

クラフト・ギルドの最高の機關であり行政の根幹をなすものは總會であつた。總會は少くとも年に一回、多い所では四回位開かれた。總會には組合員の全部が出席した。この規定は嚴重で出席しない者は高額の罰金が課され、缺席四回に及べば永久に除名さるべきことを定めた組合もあつた。總會では役員選舉の外、生産に關する協議、規約の作成改廢、新加入者の許可等ギルド關係の重要問題一切が論議され決定された。クラフト・ギルドは組合長を中心とする役員による寡頭政治が行われていたような外觀を呈していたが、實質に於いては全組合員による完全なデモクラシーが實現されていた。このことは近代政治が時にデモクラシーの外觀を示しながら、實質的には一部の者のみによる政治が行われるのと全く對蹠的であり、我々の當面の問題にとつ

ても特に重要である。何故ならばギルドによる職業教育、即ち徒弟制度による教育が單に腕の習得、技術的訓練のみでは用をなさなかつたことを示すからである。完全なデモクラシーが實現される爲には、その成員がすべてその社會の課題を自己の課題として把握し自主的に解決するだけの能力を備えていることが必要である。ギルドに於いては組合員がすべて共通の關心によつて結ばれていたと同時に、徒弟、藝人を通じての職業教育に於いてかかる能力を附與されていたことを示している。ホモ・ファーベルとしてみならず、ホモ・サピエンスとしても教育されたことを物語る。人はこのような資格に於いてよく自らのいる世界に働きかけることが出来る。

(3) 生産様式 クラフト・ギルドは手工業者の集團であり、手工業者はいう迄もなく手工労働を主動的な力として道具を用いて財貨の生産を營むものである。生産物の良否は一にその道具を使う手工労働にかかつていた。手工的熟練こそは決定的要素であり、従つて不熟練労働は全く存在意義を持たなかつた。生産に於ける人間労働力の役割、従つてその持つ社會的意義は最も重要であり、クラフト・ギルドに於いて人的要素が主動的な地位を占めていた一つの原因がここに求められる。クラフト・ギルドの組織單位である職業は概ね社會的分業、然るも横的分業（專業分業）を示すものであつて縦的分業（生産分業）を示すものは少なかつたが、それは手工業者が單なる部分的加工をもつて満足し得ず、最初の原料から自己の技術を加え完成品にまで仕上げることが、かかる生産方法に適合していたからである。萬物の尺度がどこ迄も人間であつたギルドに於いては、血の通つた人間を抽象化し

不具にするような労働の強化や分業（作業分業）は行われなかつたのである。^(注4)生産物はそれを生産した特定の手工業者の特有の熟練を表現し、彼はこのことによつてのみ個人的信用を獲得していた。従つて彼の養成する徒弟も、その後継者として個性的な熟練——腕を磨かねばならなかつた。親方の職業教育は近代的労働者に要求されるような平均的労働力ではなくて、いわば生命のこもつた個性的熟練を與えることを目指していた。

次に手工業者は熟練と共に生産手段を所有していた。この點でも近代的な労働者とは全然異なつてゐる。手工業に必要な生産手段は労働手段たる作業場、道具と、労働対象たる原料であつたが、この内、作業場と道具とは原則として手工業者によつて所有され、原料は彼の所有することもあり注文者の所有に屬することもあつた。労働の擔當者が同時に生産手段を所有するということは必然的に小經營にならざるを得ないが、それは又當時のように、生産力の低い時代に適合していた。手工業者は小所有者として、單なる労働者ではなくて完全な經營者であり、その上彼の作品が公正價格で販賣されることによつて十分な生活を保證されていたから、彼は誰に遠慮妥協することもなく、ひたすら良心と技術的要求に従つて全力を作品に打込むことが出來たのである。手工業者の多面的人間性はここにも一つの根據をもつていたといえるであらう。

更に手工業生産はビュツヒャーの所謂顧客生産^(註5)或いは注文生産であつて、資本制機械生産に見られるような市場生産ではなかつた。勿論賣る爲の財を作るといふ意味では商品生産であつたが、それは不特定

の消費者を目當に生産されるのではなく、注文による生産であつた。注文生産では生産者と消費者とが直接に人格的に結びついている。注文者は他に轉賣する目的ではなくて自ら消費する爲に注文するのであるから、生産者の腕を一つの條件として注文する。注文者—消費者にとつては、どこの誰の製品かということが重要な意義を持つわけである。かかる人間の人格的制約は中世都市の生活が一つの共同體的性格を持つことを示すもので注目し値する。

商品の人間的要素が重要視されるものを個性的商品と呼ぶならば、ギルド手工業者の生産物は最も個性的であつた。これに對して最も非個性的な商品は資本制機械生産に於ける商品であらう。これら二種の商品の特徴を示すものとして銘と商標とについて簡単に觸れよう。銘は記號若しくは圖案が附せられることもあるが、原則としてその生産者の名が刻み込まれる。銘のある商品はその生産者が技術を最高度に發揮して作成し、その独自の品質について個人的に責任をもつことを表示した最も良心的且つ個性的生産物である。銘を持つ商品はその生産者と人格的に深い結びつきをもつてゐる。銘は文書に於ける署名に匹敵する。そのようなことは手工業生産に於いてのみ可能である。これに對して商標は本質的に大量生産に伴つて生れ出したものである。大規模工業の勃興なくしては單純商品は商標商品に轉化し得ず、それは歴史的には資本制機械生産によつて始めて可能であつた。商標を附せられた商品は標準化された商品であり、その品質が常に一樣であることを示している。そこには生産者の個性的な腕の介入する餘地は全くない。反對に生産者の特殊な熟練や人格が、完全に捨て去られること

によつてのみ、標準化された等質の商品が多量に生産され得るのである。生産力の増進や、人口の増加によつて人間の欲望は益々多岐となり、従つてこれらの欲望を充足する爲に千差萬別の財を必要とするに至つたが、同時に欲望の典型化が行われ、多岐な欲望は共通的な比較的單純なものに纏め上げられ、かかる典型化された大量の欲望を充たす爲に、標準化された等質の商品が大量に必要とされるに至つたのである。かかる商品は商標を附し、各種の廣告によつて大量に賣出される。ここで要求される生産的人間労働力は平均的抽象的性格を必要にして十分な條件とする。

(4) 労働組織 クラフト・ギルドが一つの共同體的性格を保ち、特に職業教育に於いて Human wholeness が職業技術的教育と同時に達成され得た他の重要な要因は、ギルドの内部構成——労働組織であつた。クラフト・ギルドは周知のように三つの労働階層即ち親方、職人、徒弟をもつて構成されていた。

クラフト・ギルドの最も典型的な部面を示すものは徒弟制度である。これは徒弟が親方の家に住み込んで技術的訓練の外に最廣義の市民的訓練を受け、將來一人前の手工業者になるに必要なあらゆる教育を受ける制度であつて、クラフト・ギルドはこの徒弟制度を樞軸にしてすべてが展開して見たと見るべきである。徒弟は形式上は相互契約によるもので徒弟契約書を作成し、家族の承諾を得て親方の家に住込んだのであるが、それは實質上親方と徒弟とが共同責任をもつて次の時代を作つて行くことを意味していた。親方は自分の家庭内の職場に於いて技術的訓練——手工業的熟練の體得を教育したばかりでなく、

市民的教育、特に將來ギルドの構成員としてギルドの行政のみならず都市の行政にも参加する爲に必要なあらゆる教育や品性教育、一般教養をも授けた。徒弟の側もやがて親方になることが約束されていたから、單なる技術教育を受けるのみでは將來の準備をなすことにならなかつたのである。徒弟は親方の家庭に於いて衣食住の一切を支給されたが、親方の労働や時には家事労働を無報酬で助けていた。徒弟が小遣という形で若干の給料を與えられるようになったのはずつと後のことである。親方が徒弟を「善良にして十分なる職人」とするの義務を怠る時は徒弟はそこから自由に出ることが出来たが、然らざる限り親方の職業の祕密を嚴守し、その命令に絶対に服従すべきであつた。徒弟の年齢は勿論その職業に堪え得る年頃でなければならず、従つて職業によつて異なるが大體十歳前後から二十四歳位迄であつた。徒弟として住込んで修業する期間も勿論職業によつて異り、二年位の短期のものから十二年に及ぶものもあつたが、ロンドンでは大體に於いて七年としたものが多く、後には七年が法制化された。大陸では三年から八年迄が普通であつた。^(註6)一人の親方が持ち得る徒弟數は最初は自由であつたが後には既述の如く多くのギルドが一人か二人に限定するに至つた。^(註7)

親方は自分の養成している徒弟を組合に登録する義務があつた。徒弟が定められた住込期間を経過すると職人となる。職人は journeyman の語源が示しているように一種の賃銀労働者であり、獨立の手工業者となる直接の前段階をなすものであつた。その賃銀は所謂公正賃銀の原理に基いてギルドが決定した。職人はこの賃銀を蓄積して後に親方として一家を構える資金とした。彼は徒弟として教育を受け

た親方の家で労働奉仕をすることもあつたが、他の親方に雇われることも自由であつた。かくて職人は數年間技術を練磨し、親方となる資金を蓄える爲に働いたのである。大陸特にドイツでは職人は諸方の職場を遍歴して自らの技術的な手腕を磨き、見聞を廣めること數年に及ぶのが通例であつた。このような遍歴を終ると職人は再び最初の親方の職場に歸り、そこで一つの製作品 *masterpiece* を作り、それを親方の屬するギルドに提出して親方になる試験を受けた。これに合格すると一人前の親方として、自分が徒弟の時代から修業してきた親方の暖簾を分けてもらい、一定の加入金を支拂つてギルドのメンバーになつた。

親方は獨立手工業者でありギルドの構成員であつた。かかるものとして市民権の主體でもあり、ギルドに於ける身分構成の最高の地位を占めていた。然しながら我々の銘記すべきことは徒弟、職人、親方というギルドの労働組織は形の上では身分的に固定されていたが、その間には完全な融通性が存在していたことである。この點では當時に於ける他の身分關係即ち封建領主と農奴との關係とは全く異つていた。この兩者は絶對的に隔絶せる身分であり、一方から他方になり得るということはなかつた。ギルドに於ては徒弟から親方になるのに眞の障礙といふべきものは存在しなかつた。徒弟が一定の期間親方の家で教育を受ければ當然に職人となり、職人が一定水準の製作品を作る能力があると認められれば當然に親方となり、ギルドの組合員になり得るのであつた。要するに徒弟から職人を経て親方に至る迄、その間の身分的な相違は單に段階的なものに過ぎなかつた。このことは、特に産

業革命以後の資本制生産組織に於ける資本家と労働者との差異が全く階級的であつて、融通性を持たないこととも顯著な對照をなしている。ギルドの身分的融通性はその社會に於ける人間形成の問題を考え、更にギルドでは身分的融通性に加えて門戸開放が行われていた。實際ギルドはその獨占を強固に維持發展させるためにも、少くとも初期においては、すべての能力ある職人を加入させることに努め、時には他の都市の親方や職人迄も受入れることさえあつた。^(註8)身分的融通性と門戸開放とはギルドの組合員の相互扶助、強固な團結、産業統制を可能ならしめ、中世的な全體主義的共同體制を生む重要な支柱であつた。

我々は以上に於てクラフト・ギルドが如何なる活動をしたか、その共同體的構成が如何なるものであつたか、そこでの人間構成が如何に行われたか、特にホモ・サピエンスとホモ・ファアibelとの統一形成が如何に行われたか、それらのことが如何なる基礎乃至裏づけをもつて可能であつたか、等について考察してきた。勿論クラフト・ギルドは我々が描いてきたような、いわば理想的な状態にのみあつたのではなく、後にギルドが伸び行く生産力の束縛と化し、遂に崩壊する原因となつた多くの弱點をも藏していた。又我々は、クラフト・ギルドが一定の人口と技術、或いは生産力を前提とする手工業的經濟體制に於いてのみ可能であり、又前述の組合員の精神生活の水準の低さや、彼等の生活が傳統にとられたものであつたこと等を無視してはならぬ。然しすべてこれらのことにも拘らず、クラフト・ギルドが一種の現實的な共同體であり、そのメンバーたる各個人が物的な力を支配し

ており、その素質をあらゆる方面に發達させる手段を持ち、従つて人格的自由を持つていたことを否定することは出来ない。徒弟制度が工業的秘技の體得と共に全人的形成を行い得た理由もこの點から明らかである。蓋し人間生活は技術的職業的側面の外、あらゆる側面をもつていたのであるが、手工業者に於いては技術的人間と他の例えば政治的人間とが直接に一致していたからである。

註(1) Clough & Cole, *Economic History of Europe*, 1947, p. 29

(2) Grammar School

(3) 尾高邦雄、職業と近代社會、一六頁以下参照。

(4) 木村元一著、ゾムバルト近代資本主義、三一頁。

(5) S. M. Wickett, *Bücher's Industrial Evolution*, p. 170

(6) Clough & Cole, op. cit. p. 35

(7) 此等の諸制限については Adam Smith, op. cit. vol. I, p. 120, ff.

(大内兵衛譯、岩波文庫版第一卷、二三二頁以下)にすぐれた叙述がある。

(8) Clough & Cole, op. cit. p. 36

三

最初に少しく觸れた所であるが、我々が産業革命以後の資本制機械生産の時代に眼を向けるならば、そこでは事態が全く一變していることを發見するであろう。先ず資本制經濟の精神的支柱が經濟的個人主義であり、政策の基調が自由競争、自由放任であることはアダム・ミスが古典的な表現を與えた通りである。彼がこの見地からギルド制度を強く攻撃したことも周知知られている。^(註1)人々は自らの最善の經濟的考量、即ち最大の利益獲得という觀點から最も合理的な考慮に基いて行動する。そこには社會的連帶の片鱗もなく、人々はひたすら自己

の利害にのみ狂奔する。資本制社會の初期に於いてはその内部矛盾の一切が隱蔽され、反つて私益の最大限の追及こそは、始めから公益達成を意圖した場合以上に社會全體の利益を増進するものであるという、私益と公益との自然的調和論が經濟思潮の基盤をなすものであつた。かかる社會に於いては、人はただ私的物質的生活のみを自己の課題として追及し、廣い意味での政治的 성격は彼から分離してしまふ。これは前述の精神的勞働と肉體的勞働との分業の一層の進化に對應するものであつて、我々がギルドで見たような Human wholeness は先ずこの面から失われる。

我々は前節に於いて、表面上ギルドが組合長を中心とする役員の寡頭政治のように見えながら、實質的には完全なデモクラシーが行われていたと述べたが、近代的市民社會ではこれと逆のことがいい得るのである。近代民主主義革命は社會の全成員に對し自由で平等な法的人格を附與するという偉大な業績を達成した。憲法下の近代的民主的代議制國家がその完成形態である。處が近代民主主義革命は全社會成員の法的人格的自由と平等とを確保すると同時に、その物質的私的生活を開放した。^(註2)人々は、特に生活の手段を持たない勞働者は、私的物質的生活に狂奔せざるを得ない。然もそこには經濟的個人主義と自由競争とが支配している。貧富の差が擴大する。政治的自由が人間そのものの自由と等しくなく、法律的平等が人間の生活そのものの平等を意味しないことが明らかになる。職業生活の狭い分野に自己の全能力をあげざるを得ない人々は、爾餘の生活分野に對して盲目になり、いわば精神的に不具化する。技術的人間と政治的人間とが分離し、後者は

一部の人によつて代表されるに至る。民主主義革命の理念たる政治的共同体が形式のみの空虚なものとなり、抽象的幻影化する。ここではアダム・スミスの如く「國家の重大にして廣汎な利害問題については完全にその判断能力を持たない」人間の形成が行われる。

クラフト・ギルドの手工業者は自ら生産手段を所有し、職人や徒弟と共に自ら生産を行つた。單に生産技術者であつたばかりでなく、商人、組織者等々の役割をも果す小經營者であつた。彼と職人、徒弟との間も單に賃銀による結びつきではなくて人格的なものであつた。彼等は熟練と人格の全部を傾注して製品を作る。そこでは一切が有情化されていた。資本制生産、特に機械生産が支配的な生産形態となるにつれて事態は全く異なつてくる。ここでは巨大な機械や設備と、生活手段を持たない多數の労働者とが相對している。「巨大な企業は人間間的たるには餘りに大きすぎる。それは個々人の人格を壓しつゝ程成長する」(フォード)。一切が組織化され、人は組織の一部であればよく、かかるものとして情意を捨てなければならぬ。「組織が人格に代る」(テラー)。すべての種類の分業が極度に推し進められるが、特に作業分業では労働は水平的にも垂直的にも最高度に分割される。機械は益々組織的に人間的要素を排除し、労働者は機械の附屬品の觀を呈し、遂にはコンベヤー帯による自動的流れ作業の一大體系が出来上り、同一規格の製品が労働者の腕や人格や意向とは無關係に整然と作り出される。^(註3)かかる個性を喪失した商品の大量生産は市場生産に對應するものである。注文生産と異なつて、ここでは特定の人を對象にして生産されるのではない。生産者と消費者との直接的連絡は斷ち切ら

れ、兩者の間には各種の商業者が介在する。商標を附して大量に賣出されている個々の商品を、どの誰が作つたかというようなことはどうでもよいことであり、又現實に知ることが出来ない。更に巨大な生産手段を生産者が直接所有することも不可能である。寧ろ生産者が生産手段から離れることが大規模機械生産の成立する一つの前提條件でさえあつた。それ故にこそ人々は雇われて組織の一部となり、機械の附屬品となつても私的物質的生活を守らねばならないのである。

ゾムバルトは嘗つて資本主義經濟體制の理念に照應する労働關係は次の諸條件を満足させるものでなければならぬことを指摘した。

- (1) 資本家的な純粹企業者が無所有の純粹労働者と對立すること。
(社會的地位)
 - (2) 兩方共斷乎たる資本主義的經濟心意が支配すること。……營利原則及び經濟的合理主義が貫徹されること。(労働者の心理構造)
 - (3) 労働關係が契約の上に立ち、嚴密な報償原則に基礎を置くこと。
(労働契約の形式と内容)
 - (4) 經濟の内部では労働が純粹に合理的な(収益性の)觀點から組織され、個人的な欲望は一切無視し、協業と分業を極端迄實施し、且つ労働過程に中斷がないこと。(經營内に於ける労働とその組織)^(註4)
- 資本制社會を構成する資本家的な純粹企業者と無所有の純粹労働者とは、相互の融通性という點ではクラフト・ギルドの三階層とは全く異なる。それらは隔絶した階級であつて労働者が一定年限を經過すれば、當然に資本家や企業者になれるというような融通性は全く存在しない。

機械生産の求める人間は、手工業生産におけるような特殊の熟練をもつ人間ではなく、平均人であれば足りる。商品が個性を喪失すると同じく、それを生産する人間労働力も個性を喪い等質的となる。然も技術的分業の推進と共に労働力は愈々単純化して行く。かかる事態は肉體的労働の部門でのみ起るのではない。精神的労働の内部においても一層の細分化が進むと共に、それに適合する偏頗な一面的な専門家の群をつくり出すのである。クラフト・ギルドにおける完全職人の代りに、寸断された各生産行程を擔任する専門的労働者が登場する。然し生産力の發展は分業の發展の程度が最も明瞭に示すものであるから、之によつて生産能率は飛躍的に増大した。斯くて我々は物質の無限の豊富の中に愈々一面化して行く人間を見るのである。

機械生産に従事する労働者は製作意欲が進まないから仕事を止めるというような事は許されない。機械の回轉につれて自らも自動機械のように正確に働かねばならぬ。そして本來は機械を使うべき筈の労働者が實は機械に使われる存在になり下つて了つた。更に、終日機械の傍に立つて同一の仕事を無限に繰返すことさえ誠に單調きまるものである上に、分業の發展によつて労働者の仕事は生産のほんの一部となつたから、そこには何の製作の喜びも見出せない。^(註5) マックス・ウェーバーは職業の専門化に伴う多面的人間性の抛棄、並にそこに現われる職業倫理について次の如く述べた。「近世の職業労働が禁欲的特質をもつてゐるということは、決して新しい思想なのではない。専門の労働に専念すること、その結果たるファウスト的な多面的人間性の斷念とは、今日の社會ではすべて價値のある行爲の條件であること、

斯くて『仕事』と『諦め』とは今日では切りはなし得ないこと、こうした市民的生活様式の……禁欲的基調は、すでにゲーテもその人生觀の高みから彼の『遍歴時代』とファウストの生涯にあたえた終幕によつて、我々に説かうと欲したものである。彼にとつてこの認識のもつ意味は、完全に美しい人間性の時代からの訣別と斷念とである。^(註6) マックス・ウェーバーはこういう清教徒的な禁欲主義が、機械的生産の技術的經濟的條件に支配される近代的經濟秩序の力強い機構を作り上げる要因であつたことを重視したのであるが、逆に機械的生産こそは益々かかる一面的人間と禁欲主義とを必要とし、且つ生み出しつつあるということが出来る。然もここにおける禁欲的職業倫理は、清教徒的な禁欲即ち救いの自己確信を獲得する爲職業労働へ没入することでもなければ、クラフト・ギルドの手工業者のように製作に喜びを見出すという職人氣質的な仕事本位でもない。人は自己の生活を維持する爲に、極度に専門化された職業に従事し、單調極まる部分労働に禁欲的に専念せざるを得ないのである。

註(1) cf. Adam Smith, op. cit. vol I. p. 120 ff.

(2) 川久保公夫「市民社會と共同體の概念」經濟學雜誌第二卷第五、六號並頁。

(3) 木村元一、前掲書、三七九頁。

(4) 木村元一、前掲書、二二九頁。

(5) 林健太郎、世界の歩み、上巻、一二三頁。

(6) マックス・ウェーバー、プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神(梶山力譯、二四三―二四四頁) 傍點引用者

四

以上我々は資本制機械生産のもつ諸側面について、人間の全面性の

喪失——人間の抽象化という觀點から考察した。資本制機械生産は勿論偉大な功績と長所をもつと共に、我々の見た以外の有害な點も多くもつて^(註1)いる。然しそれ等は何れも我々の主題にとつて關係が少いので觸れない。機械生産の最高水準を行く米國でその弊害が強調され、「生産過程の専門化が發展するにつれて起る労働の細分化はすべてよくない。我々はもつと手工業に近く復歸すべきである、と屢々論ぜられて^(註2)いる。」然しながら機械生産における分業の弊害を強調する餘り、このような復古的な結論を出してはならない。我々のクラフト・ギルドの歴史的研究も素よりかかる意圖に出づるのではない。經濟的基盤の全く異なることを思えば、そのような逆轉は無意味でもあり、不可能でもある。そうではなくて機械生産の特質を、クラフト・ギルドの生産體制と比較することによつて一層明瞭に浮彫にし、發展的立場から、この弊害を如何に克服し、失われた Human wholeness を回復するか、そこで教育特に職業教育は如何なる役割を演ずるか、という點から問題を考えねばならないのである。近時米國で職業教育に徒弟制度をとり入れることが提唱されているが、これも技術教育的考慮、或いは社會的適應の觀點からのみ取上げられたものであれば、我々は組みすることは出来ない。

既述の如く機械生産における分業の發展は、愈々等質にして單純な労働力を大量に必要とするに至つたが、この種の労働力は生まのままの労働力であることを意味しない。それは機械生産が自然科学の急速な發展を前提しているからである。機械生産の主役は機械であり、機械は高度の自然科学的原理を應用した技術の體系である。従つてそこ

に働らく労働者も又一定の知識や理解力を身につけていなければならぬ。生産における科學の應用が進歩し、機械が精密と複雑を加えるにつれて、労働者に要求されるこの水準が高くなることは言うまでもない。機械生産がかかる資格をもつ労働者を、然も大量に必要とする處に普通教育或いは義務教育の行われる根據があることは多くの人々の指摘する所である。^(註4)このことは又明治維新以後の日本の急速な資本主義化、軍國主義化と、普通教育、社會教育の進展とを顧みても明らかに首肯されるであらう。

職業教育についても同じことが當てはまる。「手先の技能に對する要求から、技術的知識とその知識を上手に仕事に應用する技能とに對する要求へと、要求の重點が移るにつれて、組織的訓練によつて仕事に對して資格づける必要が起つた。この事實に對する認識が職業教育に對する關心を新たにし、之をもつと效果的にする爲に、もつと組織的にする色々な手段がとられるようになった。^(註5)」ここに學校における職業教育、特に公共管理による職業學校設置の根據があり、それを貫く一つの考え方は「一般的に言つて組織的職業訓練は一つの能率手段である^(註6)」ということである。かくて職業教育は労働者を機械の一層能率的な部分品となる訓練、及びその準備教育をすることになる。一方高度の機械生産においては、手工的熟練とは全く意味の異なつた科學的熟練をもつ少數の高級職工及び高度の精神労働者が必要となつて來るが、彼等は分業の微細化に適合して益々一面的専門家として養成されることになる。

我々は教育、特に職業教育における社會的適應なる機能が強力に推

進されるとき、現實にどのような人間が形成されるかを見た。然し教育は斷片人の大量生産のみを目的とするものではない。教育はそのように目的や存立の根據について他律的性格のみをもつものではないであらう。最初に述べたように、人は一定の世界を前の時代から受けつぎ、之に變化を加えて次の時代に渡すのであり、かかるものとして人間は最も主體的な存在である。世界に働らきかけることは一面的な斷片人では不可能である。あらゆる素質のもつと豊かに伸びた全般的視野を必要とする。教育は世界に働らきかける人間を形成するというもう一つの機能をもつている。これはクラフト・ギルドの崩壊以後、工場制手工業、大機械工業の發展につれて喪失されつあつた人間性の回復の要請である。然し教育のこの機能の發揮は決してスムーズな過程ではなかつた。資本の蓄積に狂奔する産業社會との衝突があつたからである。かかる状態の下で人間性を回復せんとする近代社會の苦惱の現われは「一般教養」であらう。然し例えば英國で最初の工場法が一八〇二年に通過したが、之が労働時間の制限と衛生規則の他に、読み書き算術についての教育の義務を負わしめたため、工場所有者達の猛烈な反對を浴び、間もなく一八一四年廢止され、その後一八三三年に至つて始めて新しい工場法が成立し、労働と教育の結合の原則を樹立したことを想起すれば、一般教養の歩んだ道も困難なものであつたであらう。今日に於てさえも一般教養と職業教育について、その支配的目的は、一般教養は市民として最も知的に生活し、人生を理解し、且つ之を樂しむ準備を興えることであるのに對して、職業教育は最も効果的に働らくことを教えるのであり、何れも市民としての十分な資格

のために必要であるとし、或いは一般教養は特定の職業に對する關連なしに、廣義の生活を成功的に營むために必要とされる知識、技能、態度を教えるものであるのに對し、職業教育は個人を特定の職業に適應させる爲の知識、技能、態度を教えるものであると言いながら兩者の關連となると、一般教養は職業教育に先行して、職業教育は一般教養を基礎として用いるとか、一般教養のねらいは職業訓練に必要な初歩的學習手段の用法や一般的知識の下地を用意することである、という考え方が支配して居り、一般教養の問題も決して簡單ではない。然し我々は人間の全面的素質の發達の要請を、人間性回復の要請を、單なる苦惱に終らしめてはならない。それはみのり豊かな結實をしなければならぬ。その爲にはちりぢりに分裂した個々人を、その知性によつて、一つの共通の紐帶によつて結びつけることが必要である。即ち新しい社會的連帶性の意識が生れなければこの要請は達せられない。そして我々はこの意識の生れる準備が次第に出來つつあると考える。そのことは、近代資本主義が高度に發展するにつれて、初期の純粹な經濟的個人主義や自由競争が行われ得なくなり、多かれ少かれ社會的考量を要するようになったことによつても示されている。斯くて前述の觀點とは異なつて、地域社會の中で日々の營みの他に、その中だけでは理解し得ないような擴大せられた課題を理解せしむる爲の、廣い視野をもつた人間形成の機關が要求せられるに至つた點に公的學校の存在意義を求めざる學者も多い。職業教育においても、産業の建設發展に積極的且つ有能に参加し得る職業人、社會的連帶性の意識と廣い視野をもつ職業人の養成が注目されている。かかる意味の人

間形成が職業教育で現實に行われるとすると、職業教育は從來の範圍を大きく破ることになる。この意味で職業教育と一般教養とは相互補足的、流用的、或いは重複的であるべきことが主張されているが、^(註11)我々も人間の一面性の克服の一つの重要な鍵が職業教育と一般教養との統一にあることを肯定する。然し我々はこの線にそつた教育の改革のみが問題を本質的に解決するとは思わない。それには更に教育の據つて立つ基盤における問題の考察を必要とし、その場合先に我々の見たクラフト・ギルドが重要な示唆を與えるのであるが、これ等については稿を改めて述べる豫定である。(完)

註(1) 例へば Encyclopedia Americana, 1947. vol. X. pp. 705-706 を見よ。

- (2) Ibid. p. 702.
- (3) cf. Struck, op. cit. pp. 145-147.
- (4) これ等の點については「思想」一九五一年四月號、大内力、今井譽次郎氏等の論文参照。
- (5) Prosser & Quigley, op. cit. p. 9 (前掲譯書九頁)
- (6) Ibid. p. 12 (譯書一二頁)
- (7) Prosser & Quigley, op. cit. p. 10. (譯書一〇頁)
- (8) Struck, op. cit. p. 5.
- (9) Prosser & Quigley, op. cit. p. 11. (譯書一一頁)
- (10) 大田堯「地域社會と教育」一〇二—一〇四頁参照。
- (11) Encyclopedia Americana, 1947. vol. XXVIII. P. 161.